

コラム

「エネルギーにもある虐めの構造」

客員研究員 新井 光雄\*

テレビで月一回のテレビ番組を担当していたことがある。エネルギー問題に関連して、その時々  
の話題をエネルギーの専門家に聞くというスタイルで、当方は質問者。インタビュアーをやら  
せてもらった。そのなかで一度、当研究所の十市勉・専務理事に石炭問題を聞いたことがあり、  
その時の言葉が今も印象に残っている。「石炭は少し悪者にされ過ぎです」というような言葉だっ  
た。ぴたりと石炭のおかれている状況を言いあてた言葉であり、講義やら講演で石炭の話をしをす  
る際につかわれてもらっている。その微妙な言い回しが好ましいと思ったからである。

でその石炭をめぐる、ちょっとした問題が起きている。新設する石炭火力発電に対して環境  
省が待ったをかけるという事態が出てきてしまった。問題を単純化すれば、石炭は温暖化効果ガ  
スを化石燃料のなかで最も多く排出する。従って、簡単に造らせないということである。一見、  
もってもらしくも思えるがそうは単純ではない。石炭は確かに温暖化防止の観点だけでは「悪者」  
だろうが、エネルギー問題は温暖化だけが問題ではないということを考えておく必要もあるから  
だ。

ことのこれまでの流れはこうなる。問題の火力発電所は日本化成とダイヤモンドパワーが福島  
県小名浜に建設を予定している石炭火力発電所（20万キロワット 2基）。これに対してまず環  
境省が提出された環境影響評価準備書に対し、最大の二酸化炭素の削減対策が講じられていない  
として認めないとした。また経済産業省も実行可能な最大限の削減を図ること、という勧告を出  
した。環境省と経済産業省がそろって、この石炭火力に「否」とした形だが、両省の姿勢には微  
妙に違いがある。ここが不透明で問題をぼやけたものになっているように思えてならない。

簡単に図式化すれば環境省は絶対正義を振りかざし、経済産業省は譲歩して現実的な解決の道  
をさりげなく示したということになるのだろう。大人の解決とは言うものの、これによってもし  
建設を進めるとなると巨額のコスト増となる。そのコスト増も半端ではないようで、500億円  
前後となる建設費が大幅に増えることになる。計画している両社が撤退を含めて再検討に入っ  
たと伝えられる。

そこで問題は最大限の努力という基準となるが、これが曖昧。石炭にバイオマスを混入しての  
混焼などが考えられており、具体的には石炭ガス化複合発電（IGCC）並みの排出という見方  
もあるようだ。いずれにしても数値的に明確な基準は示されていない。これだけ騒がれていると  
いうのにこんなところで曖昧が出てくる。これでは計画する側はたまらないだろう。大人の解決  
で環境省の顔を経済産業省がたてて、適当なところで妥協するのではないか、という見方もある  
が、これも時代遅れという気がする。何より気になる点は環境省の絶対正義的な発想。近く決ま  
る排出ガスの中期目標に関しても、産業界から2020年プラス4%への支持が示されると、こ  
れを「世界の笑いものになる」と一蹴してしまった。むろん、環境省には環境省の立場があるか

\* 地球産業文化研究所理事 元読売新聞編集委員

ら、産業界が一番楽な目標を選択したことに不満があったのだろう。しかし、その言い方として「笑いもの」はない。これは何もしない環境省が口先だけで、負担を被る産業界を軽視したものであり、一種のイジメ的な発言ではないか。せめて「それでは世界に通用しない恐れが強い。もう一段の努力を期待したい」程度の表現はできないものだろうか。

もっとも石炭に関しては経済産業省にも決して威張れない経緯がある。少し前のことになるが環境問題に絡み、石炭火力の天然ガス転換を促したことがある。石炭は悪い。天然ガスはいい、という単純図式化。確かに温暖化効果ガスの排出という側面だけを見ればそれは正しい。しかし、石炭政策はそれだけでなくとも一次危機以降、揺れに揺れてきた。

簡単に言ってしまうと、危機後、価格の高い国内石炭利用をやめ、安い安定した海外炭を導入しようとしてきた。そして、その成果が出てきたあたりで、今度はその海外炭もダメという。全く安易な政策転換だった。ところはこれが正しいから面倒。時あたかも、目下もそうだが、環境優先主義。この視点からは確かに、石炭は悪者。安くて安定というメリットはあっさり隠れてしまう。

そもそも石炭は普通の生活感覚にはないエネルギーになっている。従って、ニュースになるのは今回のように悪者の面が全面に出る時に限る。どことなく、原子力に似ているともいえなくもない。いや、石炭はほとんどニュースにならない。今回の問題にしても全国紙、NHKなどではニュースになっていないようだから、誰も知らないに近いに違いない。「石炭。まだそんなものを日本は使っているんですか」という人がいても少しも不思議ではないような気がする。

むろん、環境問題を軽視するつもりなど毛頭ない。だが、日本はエネルギー自給率は4%。ほとんどゼロとっていい極めて厳しい状態にある。釈迦に説法となるのを承知で、これが最大の問題点と強調したい。つまり日本のエネルギー問題は「安全保障」に最大の力点をおく必要があり、おこななければならないはずだと考える。環境問題はいとも簡単にユートピア論になりがち。口先だけですむからなのだろう。「不況で排出ガスが減る。環境省の役人は喜んでるんですかね」とある経済人。もちろん皮肉だ。だから是非、期待したいのは環境省のエネルギー確保政策。

いずれにしても、もうそろそろ「石炭悪者」の見方をやめにしたい。正当な位置づけにして、評価もすべきだ。「脱炭素社会」とはいえ、これも言葉の暴力で、脱炭素など絶対はないのだから、「低炭素」という現実的な言葉の方がいいようだ。

ところで小名浜火力はどうなるのか。再評価には時間がかかるらしいが、その結論まで関心を持って見守っていききたいものだと思っている。

お問い合わせ : [report@tky.ieej.or.jp](mailto:report@tky.ieej.or.jp)